

## 三重千人太鼓にみる和と個の関係について

中西 智子

### On Cooperation and Indiriduality in Mie Drum Festival of One Thousand Players

Satoko NAKANISHI

#### はじめに

三重県で、日本の太鼓を打つ太鼓衆千数百人の集団が「三重千人太鼓」と称して、1994年(平成6年)8月16日に千人太鼓コンサートを催した。

場所は、三重県伊勢市朝熊山麓で開催された世界祝祭博覧会(まつり博・三重'94/通称「まつり博」)会場の県営サンアリーナである。世界祝祭博覧会は、1994年7月22日～11月6日の108日間に、「あらたな“であい”を求めて」をテーマに掲げて繰り広げられ、開催期間中の8月16日に三重千人太鼓実行委員会の主催で太鼓組曲『千人響海山』の初演があった。作曲・構成は林英哲氏で、太鼓指導も林氏があたり、演奏と運営は県下の太鼓衆と三重千人太鼓実行委員会への賛同者である。

太鼓組曲『千人響海山』は、三重県の自然を太鼓音楽として表現した四楽章の構成である。

作曲・構成、太鼓指導を担当した林氏は、世界的な日本の太鼓奏者として知られており、海外の打楽器奏者と太鼓で共演、さらに、ベルリンフィルハーモニーなどのオーケストラとのソロ協演で高い評価を受けている。彼は日本の太鼓音楽を芸能から芸術へと音楽の可能性を広げる役割を果たした、太鼓音楽のパイオニア的存在の人物である。一方、演奏した三重県下の太鼓奏者は全員が素人の太鼓衆で、県下のそれぞれの太鼓グループで地域の太鼓を打っている人たちである。太鼓を打つ人たちを支えてスタッフに回ったのは、スタッフに徹して事務局の仕事を完全に引き受けた5名を中心にして、スタッフと打ち手の兼任で仕事をした人たちの三重千人太鼓実行委員会運営組織であった。

まつり博・三重'94のメイン会場県営サンアリーナでは、連日数多くのイベントが繰り広げられたが、千人太鼓コンサートへの入場者数の多さ、観衆の感動の深さの記録は破られないとまでいわれた<sup>①</sup>。

前年、1993年11月24日に世界祝祭博覧会協会(通称「まつり博協会」)が第二回目の開催内容をプレス発表した中に、三重千人太鼓の企画も含まれていた。翌日の各新聞社は千人太鼓コンサートを催事内容のトップ記事にしたのを始め、1994年8月15日の千人太鼓コンサート前日まで、新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミは三重千人太鼓の動きを追った。

そして、千人太鼓コンサート当日8月16日と翌日17日には、テレビやラジオ、各新聞社は異例と思われる程の広い紙面で、『千人響海山』の音楽のすばらしさと演奏の出来栄と観衆の盛況を報道した。

コンサートは大成功であった。太鼓衆とスタッフは客席をも巻き込んだ大きな感動の渦に巻き込まれてしまった。

当初は、まつり博協会がプレス発表した折りの予想外に大きなマスコミの反応に、まつり博協会の人たちも三重千人太鼓の関係者一同もおおいに戸惑いながらの出発であった。しかし、本来、自ら三重千人太鼓に参加希望している太鼓衆とスタッフである、彼らは期待に応えるべく揃ってあらゆる努力を惜しかなかった。その結果が8月16日の大成功となり、その後、太鼓衆のグループを越えた個々の付き合いへと太鼓衆のネットワークが確実に広がっている。

本論は、三重千人太鼓の存在が話題になり大勢の人たちが注目したその意味は何であったのか、そして、太鼓衆の太鼓組曲『千人響海山』への取り組む姿勢が真摯に熱意に満ちていたその奥にあったものは何だったのか、三重千人太鼓実行委員会代表としての筆者が、太鼓衆の音楽のまとまりと人のまとまりを、和と個の観点からまとめた研究である。

## I 三重千人太鼓実行委員会誕生までの太鼓衆

筆者は三重県下に太鼓グループは50以上60位はがあると推測している。彼らは円筒、樽、砂時計形の状態の太鼓を使用しており、太鼓の胴は木が用いられ、両面皮を鉦打ち、ひも締め、わくに直接張りつけたものなどで日本独特の真円の打楽器である。日本の太鼓は日本独自の民俗性が産みだした楽器の個性を持っている故であろうか、国外で日本の太鼓演奏を楽しむ人たちの中に二世三世の人たちが多いと聞く。例えば、「日の出太鼓」「おさき太鼓」など日本的な名前のグループで、アメリカには50グループ以上、カナダでは8以上のグループ、さらに、ドイツやイギリスなど各国で活発な活動をしているという。そして、日本国内では4,000以上の太鼓グループがあり50,000人以上の人たちが参加しているといわれているが、グループの流儀、演奏技術、メンバー構成は多種多様、多層である<sup>(2)</sup>。

日本に限らず、太鼓は神仏や人間へコミュニケーションする手段としてあって、人間生活の営みの中で必要に応じて産み出され育まれてきた『音』である。現在、一般的に太鼓グループという場合は、コンサート形式で太鼓音楽を楽しんでいる人たちのことであり、県下の各地域で虫送り、雨ごいなどの信仰的な生活必需品として用いる太鼓を打つ人たちとは、少し距離を置いているのが現状であろう。

筆者が三重県下の太鼓グループのインタビュー調査を始めた1989年当時と比べれば、1994年の現時点ですでに解散しているグループがある一方で、その数以上に太鼓グループが誕生している。

太鼓グループへのインタビューが始まった切っ掛けは、全国的に太鼓ブームといわれながら、三重県下の太鼓グループの人たちの活動が視えなかったからであった。太鼓ブームとは何なのかという疑問から、どのようなメンバーで太鼓打芸を習得し伝承しているのか、演奏活動は地域の人たちにどのように受け入れられているのか、という点を明らかにして民族(民俗)芸能としての地域文化を調査することであった。

調査の途中、23グループのインタビューを終えた時点で、太鼓の社会学という視点から資料をまとめたものが、拙著「地域の太鼓・三重県の太鼓」(太鼓雑誌『たいころじい』第9巻)である<sup>(3)</sup>。

県下の太鼓グループの説明を兼ねて、要旨を以下にまとめる。

◆ 太鼓グループの共通項

太鼓グループに共通する項目としては以下の2点がいえよう。

1. 素人集団である。

太鼓グループのメンバーは太鼓を打つことが「趣味」として位置付けられており、日常生活には各人が個々に職業（生徒、学生も含む）をもっている。

2. 生活圏重視のグループである。

地域の祭りやイベントに参加する役割を重要視している。太鼓グループが地域のイベントの中心的な位置付けになるメリットをもちながら、その一方では多様な職業の人たちの時間調整が難しく、日程調整に多大なエネルギーを要するデメリットがある。それに関わらず、彼らは太鼓の企画に積極的に参加をしている。それは、この土地ならではの自分たちの存在を継承し続けたいという強い希望を持っているからである。

◆ 太鼓グループを次の3つに分類できると考えた。

1. 地域の太鼓に関わる伝統芸能が基盤としてあり、そこから出発したグループ。

盆踊りの人寄せの太鼓音楽であったものが、地域の人々の希望や観光協会の要請などで太鼓グループへと変遷し、地元根付いた太鼓グループとして演奏活動を続けるなどである。

2. 太鼓好きから出発したグループ。

太鼓の音に魅せられた人が中心になって太鼓グループを作り、グループの歩みとともに他の地域へも波及し、それぞれの地域のイベントや祭りごとに参加しているような場合である。

3. 地域の文化おこしの発想から出発したグループ。

町村が合併して一つの町になり、新しい町の祭りの華となる太鼓グループが誕生という場合や、まつり博に市町村レベルで参加するためのメニューを検討した結果、「太鼓がいいのではないか」ということになり、役所の人を中心にして住民を誘いグループ誕生という場合などである。

◆ 太鼓グループが現在のように活発に活動する太鼓の魅力について、太鼓衆の参加意識を次の4項目にまとめることができると考えた。

1. 『集団の魅力（共属性）』

太鼓愛好家としての太鼓衆は異年令で職業も様々な人たちであり、それぞれの太鼓グループでは共同目標を持って活動をしている。共同目標の置き方の多くは後継者育成の問題、運営の問題、さらに、定期コンサートや地域のイベントへ出演することである。同じ目的のために力を合わせ、メンバーとして結束することで「うちの太鼓」という意識が主体的になり、相手の存在を尊重し協力しあい、おのずとメンバー間の相互理解が深まっていく。この過程を通して、一人では不可能なことがグループ活動で実現できる喜び、充実感を得る。

2. 『好き』からの出発

個人的に太鼓が好きという共通項を持ちながらも、個々の思いには少なからず差異がある。しかし、個人的欲求を充足できた時にグループへの帰属意識が強くなり、グループの存在価値が大きくなる。故意にメンバーを増やさずグループの演奏技術にこだわるグループ、打芸の実力に応じてグループの中で個人的欲求を生かすグループなど、グループの中で個人の意識と共同作業の目標が相互作用を及ぼしグループの個性となる。

太鼓音楽は、先輩から後輩へ手間暇かけて稽古をつけてあげる、人から人への伝承が中心の練習から始まる。楽譜から出発する場合にも、楽譜を読むということにこだわらずに口唱

歌といわれる声の記譜法（例えばドンドコドコドンの様に）で習得できる。稽古を重ねることは、間違いを直すにとどまらず、さらにどのようにして成熟した表現力ある演奏を目指すかである。太鼓好き故の努力に対して、太鼓好き故に協力を惜しまない人たちの世界である。

### 3. 『聴衆を前に演奏する快感』と『連帯感』

聴衆を前に演奏するまでの練習での苦勞、演奏直前の緊張感、演奏中の高い神経の集中度、演奏後の満足感と虚脱感、言葉に出せば一様であるが一人ひとりの気持ちは経験した者にのみ共感できる、言うにいわれないような感覚が残る。舞台が終わって「喜びの手ごたえ」を経験することが次へのステップになるようだ。同時に、同じ舞台を踏んだ仲間としての連帯感は強い。

しかし、舞台上の人間は聴衆（お客さん）とともに太鼓を媒体に《対話》をした実感を得た時、聴衆の側にも演奏者との一体感を感じ得た時、太鼓の打ち手と受け手の連帯感が生まれる。その延長線上に、太鼓グループが育つ環境が整うと考えられる。

### 4. 『流行』

近年、三重県で太鼓グループが増えている。その成立過程の要因として、①男性に加えて女性・子どもに人気がある。②太鼓購入の資金調達が安定している。③初心者から熟練者まで、各自の技量にあった太鼓打芸で音楽演奏が充分楽しめる。④異年令や職業の違う人的交流を通して人間関係の学舎的まなびやな役割を持っている、などがあげられよう。

そして、太鼓の音嗜好が地域社会で広がる要因として、人々が求める新奇性や地域での社会的文化背景がある。

上記の太鼓グループに関する調査からの考察を別の視点で表現すれば、集団における「和」と「個」の関係が円滑に、微妙に絡んだ大きな問題を孕みながら“グループが成長している”という事実である。では、県下の太鼓衆がグループの垣根を越えて、流儀も技量も年令も経験も全て無条件にし、唯一点、『県下の太鼓衆が揃ってみんなで太鼓を打ちたい』の気持ちで集まった人たちが「和」と「個」の関係で集束が可能か、ということである。

もし、太鼓衆の力を結集した三重千人太鼓が実現可能であれば、(1) 三重千人太鼓の曲を指導する太鼓演奏家によって太鼓衆の演奏能力の底上げが期待でき、太鼓グループとしての演奏能力上達へと繋がる。(2) 三重千人太鼓で演奏するという共同目標の練習を通して人的交流はおのずと期待でき、コンサート実現までの事務的な仕事をもグループ間の相互関係の意識を高めることになる。(1) (2) のように、太鼓衆にとっても太鼓グループとしても大きな成果が生まれると考える。

## II 千人太鼓コンサートの挑発

民族を共通して「祭り（祀り）に太鼓」という思考は強く、誰しものが納得してしまう一面を持つことは、あらゆる種類の民族に固有の太鼓が使用されていることから考えられる。

都道府県の博覧会や年一度の各県持ち回り国民文化祭での大きなイベントでは、多くの太鼓グループが順次出演する大規模な太鼓の出番が重視されている。一般的に、太鼓の大規模な企画では太鼓演奏の専門家でプログラムを組む場合と、全国各地で素人集団ながら実力ある太鼓グループの出演を基に、特別ゲスト出演として専門家の太鼓演奏を組み込む場合である。1994

年の三重県は、まつり博、第9回国民文化祭と祭りづいていたが、そのどちらのイベントにも主催者側の計画に太鼓に的を絞った企画は無かった。何故なのか、という疑問を県下の太鼓衆は持っていた。

## II-1 三重の太鼓衆の心意気

三重県下の太鼓衆が県おこしとして開催するまつり博へ「参加してもよい」という気持ちは、ごく自然なものであり、まつり博期間中三重県の69市町村が参加するイベントでは“うち（地域）の太鼓”としての出演はほぼ決定していた。出演演奏曲目は日頃の得意とする曲にするか、新しく曲を用意するか、などの検討を始め、グループごとの考えをあたためながら市町村に割り当てられた日の本番へと準備を進めているちょうどその時期に、筆者は太鼓グループの調査のため、県下各地の太鼓グループの人たちにインタビューをしていた。

それぞれに地域で活動しておりながらも、現状で満足しているグループがある一方で、「我々はよその太鼓と比べてどうなのか」という音楽レベルの上達を目指した、一抹の不安を拭いきれない数人のグループリーダーに出会った。彼らのグループの伝承形態は充実しているように思われ、グループの存在も県内では知られている。しかし、現状に安んじることなくグループの将来を気遣う人たちとの出会いは、筆者に昨今の太鼓ブームについて共に考えていきたいという決意を強くさせた。研究者として文章を残すだけでなく、太鼓ブームという実態と、現在どんどん増え続けている太鼓グループの存在が県民の生活にどのように反映していくのか、ということまで関わっていききたい気持ちになった。

誕生して間もない太鼓グループでは、往々にして目先の派手さを追っているように感じられるところがあった。そして、曲の解説は曲名に表しているような地域密着でありながら、どこも同じような音楽に聞こえてしまう。いかにもこれが太鼓音楽である、と尤もらしく堂々と演奏されては聴く方が彼らの何を受け入れていいものかと戸惑うことがある。ところが、そういうグループのメンバーに「うちの太鼓はこのままでいいのだろうか」と心中怏々としている人がいたりする。インタビュー後の世間話の折りには、他の地域との太鼓グループの交流が殆ど無いこと、巧い専門家の演奏を聴く機会が極めて少ないこと、などの話が必ずあった。そして、まつり博では太鼓の企画が何故無いのか、すればいいのに、してほしい、するんだっただけひ参加したい、誰か太鼓の企画の言い出しっぺが必要、ぼちぼち動かないと間に合わない、などの経緯があって、筆者が三重千人太鼓の企画案を作ることになった。実戦部隊として津高虎太鼓の事務局長である岸田眞氏と二人で三重千人太鼓の趣旨をより多くの太鼓グループへ知らせることとなった。

まつり博の場で三重県でしかできない太鼓独自の企画を作り、全国へ太鼓音楽の情報発進をする「千人太鼓コンサート」の趣旨は、

- 祭りといえば太鼓が付き物。まつり博は世界の祭り日本の祭りを集めるのに、何故、日本の太鼓の企画がないのか、ぜひ太鼓の企画を入れて欲しい。
- あらたな“であい”を求めるテーマに添って、まつり博をきっかけに県民のあらたな“であい”を求めてみてはどうか。
- まつり博終了後、人々に受け継がれていく文化のソフトとして『祭りの音楽＝太鼓』は適しているではないか。
- 県下の太鼓衆が挙って参加できるデッカイ企画をまとめたい。コンクールのように個々の太

鼓グループが順番に演奏する形式ではなく、県下の太鼓衆全員が一つの曲を打ちたい。誰でもが参加でき、巧い人はその人なりに稚拙な人はそれなりに、同じ舞台上で全員と一緒に演奏する。太鼓衆は太鼓打芸の刺激から三重県の太鼓文化の活性化につながる。ということであった。

素人ばかりの知恵ではなく広い視野からの助言を求めて、1991年の春に三重千人太鼓の構想を助六太鼓代表の今泉豊氏に話した。彼は「これは日本中の太鼓人の夢ではないかしら、是非とも実現して欲しい」と意見を述べ、プロの立場から貴重な助言なども頂戴した。そして、日本芸術文化振興会・国立劇場調査養成部部長の西角井正大氏に打ち明けた。「まつり博の内容に合った独創的な企画だと思う。是非実現をして欲しい、自分にできる協力は惜しまない。ただし、実行するのは並大抵の努力では無理だと思いますよ。千人の太鼓衆を動かす苦労とお金の問題は素人には想像を絶することばかり、それなりの覚悟が要りますよ。このような大きな企画には並み外れた人（名誉あるバカ者）の存在が必要です」というお話に、今更ながらすごいことを計画しようとしているのだと思い知らされた。しかし、太鼓衆も筆者も実現に向かって気持ちがぐんぐんと動き始め、既に止まれるような状態ではなかった。そして、三重千人太鼓の企画案を作成し、まつり博協会の意向を打診し始めた。

全員が同じ曲と一緒に打つ三重千人太鼓構想はまつり博への祭り気分を一層掻きたて、コンサートの実現へと気持ちが膨らみ、醸造されていった。その結果、三重千人太鼓へ参加表明した人の数が前代未聞の1378人という数字になった。太鼓衆全員が一つの曲を演奏するという考え方は、参加人数が多い程に難しい問題点を抱えるであろうと誰もが判っていた。しかし、全員前向きに考えており、実現不可能というより何とかできる、実現する、と信じていた。

なぜなら、株式会社浅野太鼓専務取締役の浅野昭利氏の力強い協力を得て、1993年7月に林英哲氏へ我々の三重千人太鼓の作曲依頼と合わせて太鼓衆への稽古をお願いしていたからであり、林氏からの断りは無かったからである。曲ができればいつからでも稽古に望めるように準備を進めていた。

## II-2 三重千人太鼓は真珠のネックレス構想

県下の太鼓グループの一つひとつが個性をもって輝き、たくさんのグループが連なれば大きなりっぱな輪ができる。その輪は和にもなり、莫大なエネルギーを集結することになる。グループの「われわれ意識」を県下の太鼓グループ全体の「われわれ意識」にした莫大なエネルギーが動くには、多くの人々が自発的に共同目標に向かうことから出発しなければならない。その共同目標になるのが『千人太鼓コンサート』であった。

真珠のネックレス構想とは、「一つのグループが一粒の真珠」の考え方で、「三重千人太鼓の曲が一粒一粒の真珠を通して真珠のネックレスを作る」というものである。

りっぱな真珠のネックレスには一粒一粒の真珠がりっぱでなければ成り立たないことは自明である。そして、県下の太鼓衆とのインタビューで「一つのグループが一粒の真珠」として育っている状況把握はできていた。

例えば、太鼓グループという集団での個人は、グループの機能を継続していくに必要な存在であるという自覚を持ちながらも、一人ひとりの自分自身の生活に関わって個人の意志がどのように満足できているか、という内面的な充足を求めている。そして、意識的にか無意識的にか、グループに所属していることで自分の過去、現在、未来への検討が行なわれ、グループへ

愛着を持ったり離反することになりながらも、共同目標に向かって努力を続けていた。

太鼓グループの組織は5～6人から100人、200人という大所帯まで、集団の大小は様々であるが、それぞれに、グループでの活動が個人をどのように育てることができるか、という問題を抱えている。即ち、グループのメンバーとして他のメンバーとの相互作用（コミュニケーション）や集団規範などによって、プラスの方向にその人の特性が変化したかどうかである。この問題は太鼓グループとしての集団がどのように育とうとしているか、ということである。それには、(1) グループの本質的契機としての共同目標の到達、(2) 構成メンバーの「われわれ意識」の高まりによる貢献、(3) メンバー個々の太鼓打芸の上達、という3つの要因がグループの成長と変容をもたらすのである。

太鼓音楽の学習では、集団による個人の能力育成が特徴的であり、人間形成をも一つの教育目標として盛り込んでいる。集団教育の効果は大きく、集団規範に基づいた行動の中で他のメンバーとの相互作用を通しながら太鼓打芸や礼儀作法を習得していた。

養殖真珠の核入れは大変繊細で難しい作業と聞いているが、以上のように、三重県下の太鼓グループの真珠はすでに核入れはできていた。それぞれの太鼓グループはりっぱに育てているグループや今大きく育とうとしているグループ、真珠のネックレス構想の基盤においては安心して各グループに参加を呼び掛けることができた。しかし、誰に真珠を繋ぐ糸になってもらうか、が最大の問題点であった。

まつり博での日程が全く白紙の状態、三重千人太鼓の練習形態が確定していない状態では、作曲と指導は同一人物が望ましい。何よりも、太鼓を打つ人間の誰もが知っている、という程の人で、太鼓衆が信頼して指導を仰げる人、という強い希望があった。初めに候補に浮かんだのは、林英哲氏であった。林英哲氏とは昭和59年に出会い、誠実な人柄と冷静な見識においては最適の人物であると確信していた。しかし、世界を舞台にめざましい演奏活動をしている人だけに、素人の太鼓衆を千人指導してくださいとは頼み辛かった。加えて、作曲料・指導料などの心配が大きかった。

ところが幸いなことに、1993年の始め頃、太鼓と人間の研究情報誌で「たいころじい」（十月社出版）の高他編集長から浅野太鼓の浅野専務に三重県で千人太鼓という企画を進めている話が届き、「三重県の太鼓衆はすごいことを考えているんやね」との強い興味関心から、積極的に我々の三重千人太鼓に協力して下さることになった。この時点で、自信を持って真珠のネックレス作りのために真珠を並べる作業を始めた。

### Ⅲ 三重千人太鼓の取り組み（芸能太鼓文化の誕生に至る和と個の関係）

#### ◎ 1993年7月3日 林英哲氏へ正式に作曲と指導の依頼

浅野専務、高他編集長が同席で、筆者が林氏に作曲と指導に関する具体的な説明をする。

「三重県にも太鼓のグループはあるのですか」この言葉を何人の人から聞いたことか、「まつり博って何ですか」の質問にも腰を据えて説明をした。三重県の太鼓衆が“県おこし”をしようとしている熱意を伝え、理解をしてもらうことはできたが、素人の千人が同じ曲を打つという発想にはすぐに返事はもらえなかった。むしろ、太鼓音楽を芸術に高めた林氏だけに、太鼓で素人千人が一緒に音を出す意味付けにおいて事例を挙げながら難色を示され、三重千人太鼓の音楽的な理論武装の弱かった筆者には、太鼓芸能としての位置付けで説明するしかなか

た。「おもしろそうですね。しかし、大変ですよ、何分位の演奏を予定しているのですか」「30分位が限度でしょう」「私が千人を教えるのは無理だから、手足になる太鼓打ちを選んで、その人たちを指導することになるでしょうか」「三重の自然、芸能、そして、太鼓グループの演奏ビデオテープを送ってください」という内容の話し合いで終わった。

◎ 1993年8月

三重千人太鼓に賛同している太鼓グループが、県内のグループへ参加を呼び掛ける。

◎ 1993年9月 三重千人太鼓事務局を十月社に置く

事務的な仕事を高他氏と岸田氏が進める。

◎ 1993年10月 「三重千人太鼓企画書」をまつり博協会へ提出

筆者の構想と企画案を基にして、高他氏が企画書と予算書を作成。

◎ 1993年11月

まつり博は多額の金額が動く県の営業事業であるが、世界や国内の既成のモノの単なる寄せ集めや羅列ではなく、まつり博によって三重県から新しく産まれる文化内容を期待する県民の声があがっている時期でもあった。

まつり博へよそから借りてきたモノは帰っていく。まつり博の後に残るのが、道路と県営サンアリーナと噴水とまつり博の跡地だけでは…という危惧と合わせて、まつり博協会としては、まつり博会場で県民の草の根運動として展開する、文化情報発進を望む意向があった。そこに千人太鼓の企画がすっぱりとはまってしまったように推察する。県下の太鼓衆1300人以上の気運を世界祝祭博覧会協会（まつり博協会）が後援することになり、三重千人太鼓コンサート開催が内定した。

◎ 1993年11月24日 まつり博協会第二回催事内容発表（三重千人太鼓コンサート1994年8月16日県立サンアリーナにて公演が公式発表となる）

◎ 1993年11月27日 三重千人太鼓実行委員会発会式及び第一回実行委員会

22人の太鼓グループ代表と個人参加6名出席で、組織構成案と事業計画案の検討をする。県内を5地区に区分した実行委員会役員を決定。今後のスケジュールについては、8月16日本番へ向かって林英哲氏との連絡を取りながら進めることの確認。

◎ 1993年12月9日 石川県松任市浅野太鼓資料館

浅野実行委員会相談役、中田氏（十月社社長）、岸田事務局長代理、筆者が今後の進め方、イベントへの取り組み方について細部まで話し合う。

◎ 1993年12月10日 東京都内

午前中、浅野実行委員会相談役、高田事務局長、岸田事務局長代理と筆者が国立劇場にて西角井顧問に会い経過報告と今後の相談。



## 組 織 構 成

### 実行委員会代表

中西 智子（三重大学教育学部 助教授）

### 副 代 表

北 勢 地 区 大貫 正博（飛龍東員太鼓）

伊 賀 地 区 高橋 嘉一（伊賀上野白鳳太鼓）

中 勢 地 区 中田 正己（津高虎太鼓）

南 勢 地 区 小久保定郎（九鬼水軍太鼓保存会）

尾鷲熊野地区 榊原 宏彦（きいながしま孫太郎太鼓の会）

### 顧 問

西角井正大（国立劇場調査養成部部长）

### 相 談 役

浅野 昭利（浅野太鼓資料館）

今泉 豊（助六太鼓）

### 作編曲・演出・総合指導者

林 英哲

### 事務局及び事務局長

事 務 局 （株）十月社 たいころじい編集部

事 務 局 長 高他 毅（株）十月社）

事務局長代理 岸田 眞（津高虎太鼓）

### 幹 事

北 勢 山本 義顕（慈光太鼓）

伊 賀 三浦 明（岩倉境太鼓）

川本 浩之（伊賀国島が原荒獅子太鼓）

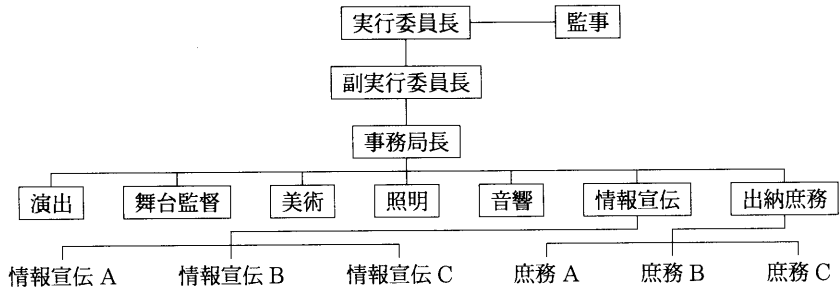
中 勢 笠間 清（葛葉太鼓保存会）

川岸 弘欣（美杉連山のろし太鼓）

南 勢 谷崎 知己（南勢牛鬼太鼓）

尾鷲熊野 大西 拓（熊野鬼城太鼓）

世界祝祭博覧会：まつり博・三重'94  
三重 1000人太鼓コンサート  
実行委員会組織編成案



演 出：全体的なプランニング

舞台監督：舞台に関する情報の収集。

演出のプランを現実化し、舞台の進行計画をまとめるための手配。

美 術：演出と舞台監督のプランを現実化するための手配。

照 明：舞台の照明施設に関する情報の収集。

演出と舞台監督のプランを現実化するための手配。

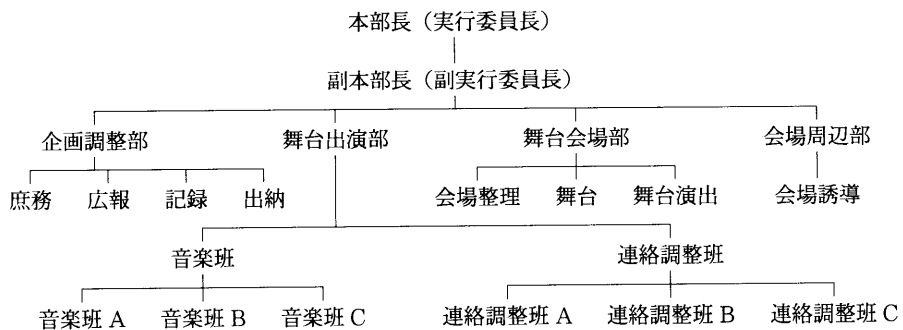
音 響：舞台の音響施設に関する情報の収集。

演出と舞台監督のプランを現実化するための手配。

情報宣伝：広報 PR 活動と外部資金の調達。

出納庶務：発生した経費を取りまとめ、事務局と調整。

実施本部組織編成案



庶 務：業務の総括。各班との連絡調整。

広 報：広報 PR 活動。報道関係との連絡調整。

記 録：事業の記録写真等の撮影整理。(練習プロセスから記録するのが望ましいので、要員は多いほうがよい)

出 納：出納全般。(A班、B班、C班をつくる必要があるかもしれない)

会場整理：会場に関する情報収集。当日の出演者、機材の運搬計画。駐車場対策。当日の会場内での案内、整理。

舞 台：舞台の設営。舞台進行に関する手配。

舞台演出：照明、音響に関する手配。

会場誘導：会場への誘導案内対策。

音 楽 班：曲の練習指導。

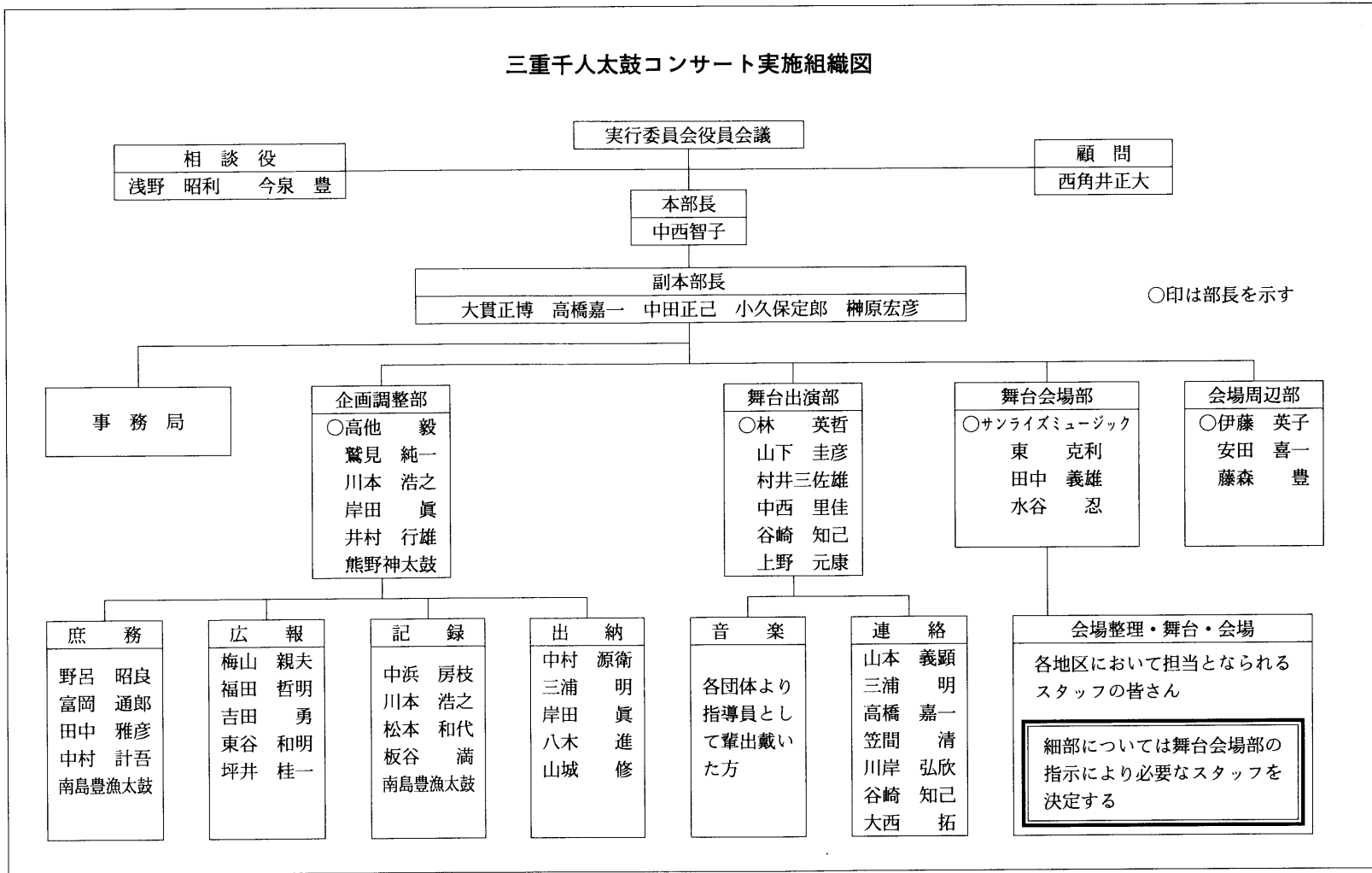
連絡調整：出演者の練習日程調整。当日の舞台進行にかかわる出演者間の連絡調整。

### 三重千人太鼓にみる和と個の関係について

午後、林英哲氏所属のサンライズミュージック社と照明、音響、舞台監督等について話し合う。すでに林氏へ届けている三重県の太鼓グループ紹介、芸能関係、四季の自然などのビデオテープ・資料に加えて、新曲創作に役立つと思われる入手可能な限りのビデオテープを届ける。参加者1,378人のリストを合わせて渡す。

- ◎ 1994年1月22日 第二回実行委員会  
実行委員会委員の仕事の確認と、練習形態の検討。
  
- ◎ 1994年2月12日 林英哲氏来津、実行委員会役員と会談  
全国的に大雪で、三重県では40年ぶりとかの大変な雪。林氏大幅遅れて到着。実行委員会役員でさえ津へ来るのを断念せざるを得なくなった人がいるような道路事情の状態。取り敢えず来れた役員と話し合いを進める。①林氏が三重千人太鼓へ参加する太鼓衆を直接指導する。②北勢・伊賀・中勢・南勢・尾鷲熊野の5地区にいる実行委員会副代表が中心となり、100～150人が太鼓を打てる練習場を確保する、など林氏と直接話し合ったことで、出席者全員少し先が見えた気持ちになる。別れる間に、林氏は伊勢の地を感じるため、一人で1月に三重へ来ていることを話された。
  
- ◎ 翌日13日 林氏が太鼓グループの演奏を聴き、太鼓打芸のレベル検討。  
雪のため全員出席できない太鼓グループがあった。しかし、何とか一人だけでも来れたグループなど、林氏に「聴いてもらえる」(林英哲に会える)ために出席した者の演奏は、緊張感がみなぎった音で各グループの個性を十分に表現していた。
  
- ◎ 1994年3月 1月から始めていた各グループが持っている太鼓の種類、数などの調査をまとめる。
  
- ◎ 1994年4月30日 第三回実行委員会及び第一回合同練習(中勢地区に集合)／津商業卸センター  
初めての練習は、林氏から当日渡された楽譜〈第一楽章〉の初見演奏と、姿勢、撥の持ち方、『音』を聞き取るということ、などの正しい演奏方法を丁寧に指導してもらうことから始まった。五線紙に並ぶ音符からリズムを理解することに初めての人、慣れていない人などには、五線楽譜への抵抗感や音を出すことへ不安な気持ちが強かったと思われる。参加者が林氏の音楽の核心を含む一言ひとことに聞き入る姿にはひたむきさが感じられた。素人とはいえ、各太鼓グループから選ばれた指導者だけに、林氏の誇張のない誠実な助言は打芸習得に説得力があった。  
自分のグループへ新曲を持ち帰って指導することに関して、指導者同士の協力体制が生まれ、指導者同士の地域を越えた交流が活発に始まることになった。
  
- ◎ 同日夜 写真家の南川三治郎氏、アートディレクター疋田琢也氏と筆者がポスターについて初めての打ち合せ／東京都渋谷区内南川氏事務所

### 三重千人太鼓コンサート実施組織図



中西智子

- ◎ 翌日5月1日 三重千人太鼓の記者発表（林英哲氏同席）、合同練習を公開する。
- ◎ 1994年5月28日・29日 第二回合同練習（南勢地区に集合）／小俣町明野小学校  
各グループや地区ごとの練習では、楽譜から演奏することに不安な人たちには辛い一カ月だったと思われる。口唱歌に慣れている人たちには、‘おたまじゃくしの楽譜’からの曲の習得には消極的な気持ちにならざるを得ないであろう。音符を言葉に翻訳(?)した、‘口唱歌の楽譜’が登場し始める。  
2回目の練習からは、合同練習会場周辺の太鼓衆ができるだけ積極的に参加するように呼び掛けた。子ども太鼓の子たちも参加できるようになっており、指導者の努力の成果を見る思いであった。一楽章の楽譜を完璧に暗譜し、楽譜を離して林氏の稽古を受ける人の姿が見られる。B4サイズの楽譜6枚を一面に並べる超特大の譜面台を持参するグループなど、参加者の熱意がみなぎっていた。  
二楽章の発表があった。太鼓を首に掛けて動きながら演奏する曲であるとのこと。
- ◎ 1994年6月 各グループや5地区ごとの練習が夜遅くまで続く。地区ごとの練習が活発になっていくにしたがって、太鼓衆の交流が練習への刺激材料となる。
- ◎ 1994年7月1日・2日・3日 第三回合同練習（北勢地区に集合）／東員町武道館  
三楽章は県内太鼓グループ10団体の競演であるため、参加グループのオーディションをした。記録的な猛暑の中、林氏の的確なアドバイスを取り込みながら、10団体が決定。オーディションを受けるために県内太鼓グループが一同に会することになり、他グループの演奏を聞き比べることができて子どもから70歳代の人までおおいに勉強になったと思われる。  
一楽章は太鼓衆の練習が功を奏して完成度が高くなる。二楽章は希望者を募り、20名で演奏することに決定。林氏は、全員が二楽章の指導を受けて音楽理解を深め、そこから、20名を選出するとのこと。
- ◎ 1994年7月9日・10日 第四回合同練習（尾鷲熊野地区に集合）／熊野灘レクリエーションホテル孫太郎内城の浜フィットネスアリーナ  
県内を巡回する形の合同練習では、参加者の交通費、宿泊代の負担は大きい。しかし、林氏が稽古をしてくれる、という喜びは全員に一致しており一切の苦情はなかった。「我が町へ林英哲が来て三重千人太鼓の稽古がある」ということにも喜びを感じてくれていたようである。林氏も県内の風土を肌で感じ、指導者以外の太鼓衆に出会って彼らの太鼓打芸を知ることには作曲に役立つようであった。そして、気付いた人には打法の助言をしていた。  
指導者達は、口を揃えて四楽章の曲完成を催促する程に、8月16日へ向かって真剣そのものであった。
- ◎ 1994年7月23日・24日 第四回実行委員会及び第五回合同練習（南勢地区に集合）／小俣町総合体育館  
楽譜から練習を始めることに戸惑っていた人も、少しずつ読取りに慣れてきたようで、新しいパートを渡されても戸惑いが少なくなっているようである。

休憩時には、子ども同士がグループを越えてバドミントンや水あそびをしたり、カッコイイお兄ちゃんにふざけていってかまってもらうなど“三重千人太鼓の仲間”という意識が育ってきている。同じ世代の人たち同士で練習のこと、まつり博の市町村デーの日程など話しており、三重千人太鼓の仲間の太鼓演奏を聴きに行く誘い合いを耳にするようになる。

林氏はこの頃から、舞台映えするためのプロのコツを参加者に話してくれるようになった。

- ◎ 1994年8月6日・7日 第六回合同練習（伊賀地区に集合）／B&G 財団大山田海洋センター体育館

三重千人太鼓の曲名が『千人響海山』に決定。太鼓衆が少しでも疑問に思うところを林氏に質問する姿が目立った。一人の質問にほかの人たちが耳を澄まして聞き入っている様子が見えがえる。近隣に限らず遠方からも練習を聴きに来る太鼓好きの人が多くなった。二楽章の演奏者（16名）が特訓を受けて、演奏レベルがすばらしく向上する。

- ◎ 1994年8月14日・15日 参加者全員総合リハーサル（中勢地区に集合）／三重県中央卸売市場

石川県松任市から「炎太鼓」の人たちがスタッフの手伝いに来てくれる。浅野太鼓が三重千人太鼓のために作ってくれた三尺八寸の大太鼓を運び入れる。「芯の太鼓」と称するこの大太鼓は二人の打ち手で演奏し、彼らの音が全員の音をリードするのである。太鼓搬入を8時から開始して本番と同様に太鼓のセッティングをする。終了は13時。その後、全員で21時まで練習。タマネギ、じゃが芋、かぼちゃんなどの山積みされた箱に囲まれてコンサート出演者全員が総練習をする。楽譜を手放せない人へ「楽譜を放しなさい。音楽全体の流れに身をおいて耳と体で覚えなさい」「視線は芯の太鼓の二人から放さないように。二人を指揮者と思って付いていきなさい」と、林氏の注意が飛ぶ。

入場、退場の練習をする。

- ◎ 1994年8月15日・16日 15日21時～16日2時の間にまつり博会場県立サンアリーナへ太鼓搬入、音響、照明のセッティング。

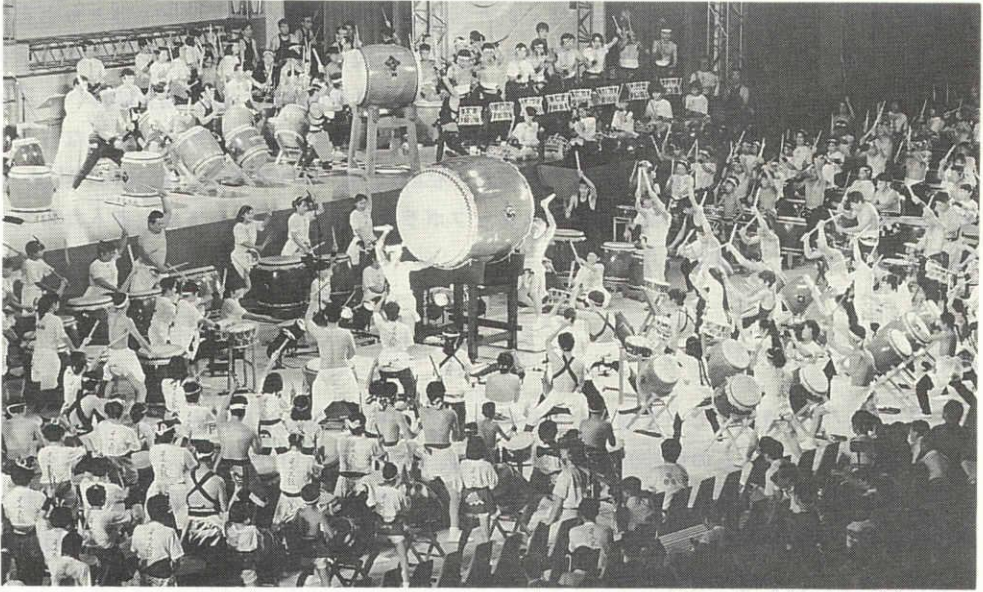
- ◎ 1994年8月16日8時～10時半まで最終リハーサル

入念な練習が続き演奏者の緊張が高まる。張り詰めた神経の林氏や太鼓衆の音楽の世界に、リハーサル中から聴衆が会場に入り始めてざわついた音が混じり、難しい空気になる。

- ◎ 1994年8月16日11時～12時半太鼓組曲『千人響海山』初演。

太鼓数770個、参加者数1200人、聴衆約6000人、  
太鼓衆全員が渾身の力を込めて演奏した。

祝祭博覧会というまつり博において、出演者とスタッフと観衆が一体感をもち、いかにも祝祭という感動の渦を経験したことは、大変恵まれた状況で終わったと喜んでいる。しかし、椅子に座れなく階段で我慢したり、本来客席としていない視界の悪い椅子席であったりと、すし詰め之苦痛を強いられた人たちへ、そして、県立サンアリーナという広い空間を会場に



(朝日新聞社 提供)

しても入りきれなく入場を断られた人たちへの、申し訳なさとお聴いていただけなかった残念さは非常に大きい。それでも、まつり博協会は出入口の都合から決められていた“会場整備の安全の保障”という枠を緩めて入場者数を広げる決断をしていた。

まつり博協会は勿論、主催者の三重千人太鼓実行委員会の緊張は、コンサート開演前から会場入り口へ向かう延々の行列を見た瞬間から一挙に高まった。そして、「入れる」「入れない」のトラブルに女性スタッフの中には恐怖で泣きだす人もいた。

『千人響海山』演奏終了後の作曲者林英哲氏のあいさつで、「人間ってこんなにすごいことができる、ということがわかりました」との言葉の如く、太鼓衆の力が結集して大きな山を動かしたのであった。

#### IV 三重千人太鼓は太鼓衆と太鼓衆を支える県民で成立

5地区の練習場周辺の住民の方たちには、地響きのような轟音で迷惑をお掛けしてしまった。轟音を騒音ではなく、音の文化として理解してくださったものと感謝している。何ごとかと自転車で見に来たばかり聞き入っている人、太鼓が好きで遠くから練習を聴きにきた人、何にもまして、太鼓衆の家族の協力、協賛してくれた企業・個人の人たち、とずいぶん多くの人のおかげで8月16日の本番へと進むことができた。

8月16日のコンサートは村の祭りで出場できなくなったけど練習を続ける人たち、舞台には立たないけれど練習場に関する一切の世話をしてくれる人たち、自分の太鼓の練習と太鼓衆の世話で走り回る人たち、県下の太鼓衆が欲得抜きで力を結集することができた。

メディアは「仲介する」という意味を持つが、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌は当初から県内の太鼓衆へ三重千人太鼓の情報を流し、同時に世間の人たちへ三重千人太鼓を話題にしてもらう手段としては大変有り難い存在であった。まつり博協会からの催しなどの情報はあたかも上意下達のごときであるが、メディアの情報は太鼓衆が三重千人太鼓へ取り組む姿勢を日常的な

姿（進行状況や練習状態の姿）で伝えてくれた。幸い、メディアの態度は一つひとつ事実を確認しながら報道するというあり方で、県下の太鼓衆と県民とのコミュニケーションの役割を果たしてくれた。そして、エールを送ってくれているまつり博協会や行政、協賛団体へ、三重千人太鼓実行委員会が現在この段階で練習や準備が進んでいます、とのお知らせにもなったのである。メディアによって三重千人太鼓の情報は「私的(?)な内部事情」を公にしてしまった。現状が明らかになることで、資金調達やスタッフボランティアに協力してくれる人たちとの関係ができ、三重千人太鼓は活力を得た。

## おわりに

太鼓グループを構成している個々の太鼓衆は、グループを越えて構成された三重千人太鼓という広い世界で人と人との精神的な繋がりができ、太鼓打ちというアイデンティティーが確立したと考える。千人太鼓の活動は太鼓打ちというアイデンティティーを共有する場であり、同時に他者の中で自分を知る場となった。それは、「みんなの演奏を聴き合うこと」が最も大切とされたように、一緒に演奏している他者のなかで常に自分の演奏を自覚することであった。太鼓衆一人ひとりとは自分にとって太鼓音楽というモノが何なのか、なぜ厳しい練習に参加しているのか、というお仕着せとは無縁である主体性・自主性の“内的な意味”を自らに問う大変孤独な試練を経験したのである。他者の存在と自分の存在“集団の中の自分”の問題は、太鼓衆に限らずスタッフにも同じことであった。このような状況に於いてまわりの人たちと会話が多く生まれた。会話を通して仲間意識が深まり、三重千人太鼓実行委員会のメンバーとしての連帯感とともに、コンサートを実現するための気合いが一層高まっていった。そして、各人の太鼓熱の純粹さと根強さを証明できた。幼児から70数歳の人までの記憶に残る出来事が三重千人太鼓への参加であり、太鼓を打つという太鼓文化の共有財産を確認できたのである。

人は幼少時の経験が何らかの意味を持つというなら、参加した子どもたちに現在は体験の意味が理解できなくても、潜在的にすばらしい経験をしたという全体的な実感が記憶されることによって、彼らは将来、幼いながら個人が三重千人太鼓の大集団を支えたという積極的な態度に意味を見出すのではないだろうか。10年後、20年後は今の子どもたちが伝承を踏まえながら、新鮮な太鼓音楽を打ち鳴らしてくれていることを大いに期待する。

三重千人太鼓は人間としての、個を充実し、個を繋いだ和の世界が出来上がったのか、それとも完成まで至っていないのか、これからの太鼓衆の課題でもある。

全国の太鼓関係の人たちに注目されたのは、まつり博とのつながりで、三重県にふさわしい新しい文化情報発進と認められたからであろうと考える。太鼓文化の歴史を過去—現在—未来へと経緯して始めて、まつり博の開催意味がソフト面で浮かび上がってくるのではないだろうか。

三重千人太鼓は、「林英哲」という人物抜きではありえなかった。作曲者としての林氏は、素人の太鼓打芸や精神的な現実の姿を把握しながら曲を書き進め、彼の創作力で太鼓衆と共に『千人響海山』という音楽を創造したのである。太鼓衆が集団となって彼に一途に付いてゆく気迫を正面からしっかりと受けてくれた。彼からは、「太鼓音楽で大切なこと」を直接教えられ、県下の太鼓衆はそれを「自分のモノ」に吸収しようと精一杯の努力をした。林氏は三重県の太鼓文化の掘り起こしをしたのであった。



### 三重千人太鼓にみる和と個の関係について

伝統芸能は、生き生きと表現し人々へ訴えていくという課題と、それを将来へ伝承していく課題を持っている。生を受けた『千人響海山』は今後どのように育つのか、継承されるのか、今回の三重千人太鼓の活動を通して活性化された太鼓文化が、ふくよかな香りをもつ年代物のワインの如くに醸成されることを願う。

しかし、そのためには、今回のような個人の活力や精神だけではなく、三重千人太鼓を維持するために企業・公共の協力を求めたい。

8月16日の三重千人太鼓コンサートを、全く予備知識無しに偶然聴いた聴衆の一人、90歳の姑が感動のあまりしばらく涙が止まらなかった、とお嫁さんから手紙を頂戴した。他の多くの人達はどのような印象を持たれたのだろうか、ビックな音楽に接した音楽体験の驚きが新鮮であったろうか、見知らぬ人からの感動のお便りなどをいただくが、これを機会に三重の太鼓衆を見守ってください。

追記：三重千人太鼓実行委員会は、平成6年度三重県平成文化賞を受賞しました。

#### 文献・資料

- (1) 雑誌「伊勢志摩」10月・11月号（通巻81号—第14巻第4号） P. 27 1994年10月
- (2) 「太鼓シンポジウム&フェスティバル」1994年9月3日／秋田県鷹巣町たかのす風土館にてパネラー浅野昭利氏言。  
浅野昭利氏は、太鼓の老舗・石川県浅野太鼓店の専務。現在、国内外の太鼓グループ、太鼓コンサートに関して最も多く見て聞いている人と誰しもが認めている人。
- (3) 拙著「地域の太鼓・三重県の太鼓」たいころじい第9巻 十月社 1993年11月
- (4) 拙著「“まつり博” に立ち上がった三重県の太鼓衆——響け太鼓衆の心に、つなげ地域を、世代を——」「季刊あすの三重」第96号 財団法人三重社会経済研究センター 1995年1月31日